

## 河村瑞賢 西廻り航路開設350年

令和4年4月9日(土)～6月20日(月)

寛文12年(1672)、江戸幕府の命を受けた河村瑞賢は、出羽国(現在の山形県、秋田県)の天領(幕府直轄領)で取れた年貢米「御城米」を、酒田から江戸まで早く安全、確実に運ぶための水上輸送航路を整備します。

瑞賢は各地に人を派遣して航路を調査し、酒田には御城米を保管するための御米置場、通称「瑞賢庫」を造りました。瑞賢庫があったのは現在の日和山公園。ちょうど瑞賢像が見下ろしている場所です。

こうして着々と準備が進み、5月に酒田湊を出発した御城米船は、日本海を西に進み、瀬戸内海を通り大坂を経て、無事7月に江戸に到着しました。これが、北前船が行き交う物流の大動脈となり、酒田湊ににぎわいをもたらした「西廻り航路」の始まりです。

伊勢国(現在の三重県)で生まれ、江戸に出て材木商となって財を成した瑞賢は、なぜこの大事業に抜擢され、どのように整備を進めたのでしょうか。

江戸時代の日本の海運に変革をもたらし、酒田湊を大きな繁栄へと導いた西廻り航路開設から350年を迎えた今年、瑞賢の動向や庄内藩の対応を記録した古文書や古絵図などからひもとき、瑞賢の功績を紹介します。

### 御城米を早く安全に運ぶために整備された西廻り航路

今から350年前の寛文12年(1672)、幕府の命を受けた河村瑞賢が、日本海廻りで酒田と江戸を結ぶ「西廻り航路」を整備し、出羽国の天領(幕府直轄領地)の年貢米を酒田から江戸に送りました。

天領の年貢米は「御城米」とも呼ばれます。西廻り航路開設以前、最上川流域から集められ酒田湊から積み出された御城米は、敦賀で陸揚げされ、琵琶湖を経由してさらに陸送、海送を経て江戸に送られていましたが、何度も積み替えや蔵入れを行うため米が傷み、日数がかかるうえ、費用がかさんで米の値段が高くなりました。

このため、江戸の人口が急増し米の需要が高まってくると、幕府は西廻りまたは東廻りの海路による御城米の直送を試みます。「振袖火事」として知られる明暦の大火など、度重なる火事でひっ迫した財政を立て直すために、重要な財源である御城米を、早く、安全、確実に江戸に集める必要もありました。

万治2年(1659)、江戸商人の正木茂左衛門らが



日和山公園にある河村瑞賢像

西廻り航路による出羽国御城米の江戸廻米を請け負います。この商人請負制では、請負商人が船を雇い、トラブルが起きれば全責任を負ったため、請負料は高額になりました。利益を優先した無理な航海が原因で海難事故も起きていました。

そこで白羽の矢が立ったのが、前年の寛文11年(1671)に東廻り航路による陸奥国御城米の廻米を成功させた瑞賢でした。瑞賢は、経費削減のため船は幕府が直接雇うこととし、航海の安全を確保するために綿密な計画を立てます。5月に酒田を出帆した船は7月に無事江戸に到着し、ここから安定した廻米制度が始まりました。

戌(寛文十年)の正月晦日に大石田より御越し  
申し候返事の趣、止め置き申し候。  
先月晦日の御飛札(※)、当四日  
到着、忝く拝見せしめ候。御意の如く  
春陽の御慶、事旧と雖も、何方も  
御同前に申し納め候。然るに御上(城)米  
運賃の儀、正木茂左衛門、毎年  
相場にはずれ下値に買い申すについて  
此方、川舟の者ども迷惑の由  
申し候えども、其御地思し召し存じ候わぬゆえ  
其通りに仕り罷り有り候処に、笹原六左衛門殿  
御心底の趣、岡村半六方申し聞かせ、  
それに就き、河舟の者ども、旧冬、御地へ  
罷り越し候節、御紙面の趣、此の方  
※飛札：急ぎの手紙

留書帳(伊東家文書よ)  
寛文八年(一六六八)〜延宝三年(一六七五)  
原本は酒田市立光丘文庫蔵

寛文10年(1670)1月、正木茂左衛門が御城米の最上川川下し運賃を法外に値下げしたため、酒田と大石田の川船差配役(大庄屋)が手紙を使って情報交換しながら、運賃値上げの交渉をしたことが書いてあります。こうしたトラブルが多かったことも、御城米廻米を幕府直営にし、瑞賢に新たな廻米制度を整備させた理由のひとつだったのかもしれない。

## 瑞賢が御城米廻米を命じられたのはなぜ？

河村瑞賢は伊勢国度会郡東宮村(現在の三重県南伊勢町)で生まれ、江戸に出て商人として成功をおさめた人物です。

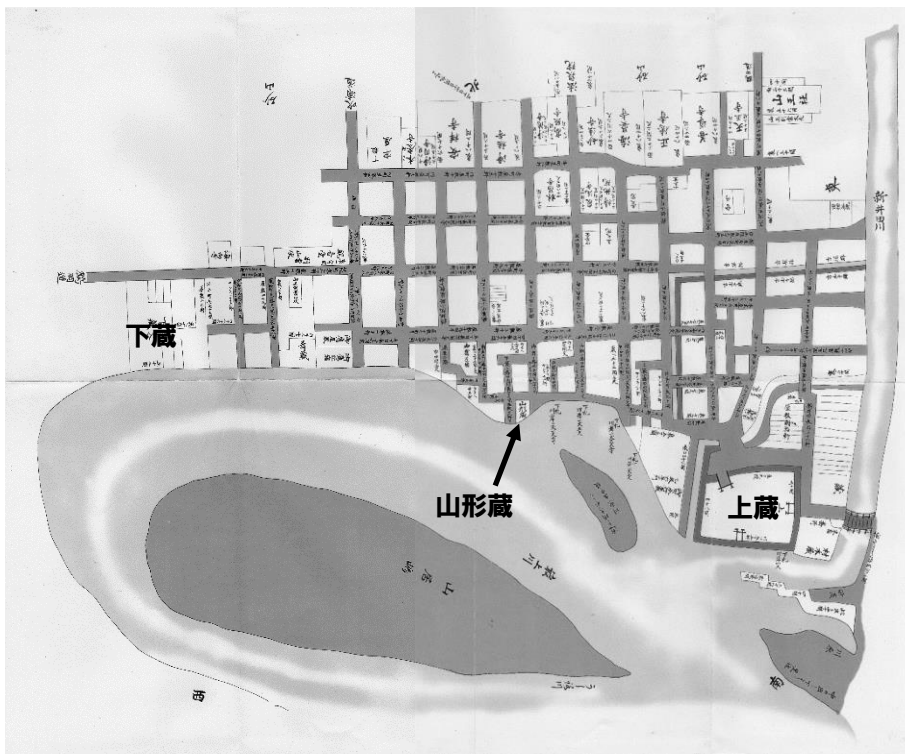
明暦3年(1657)の江戸の大火の際、復興のために大量の材木が必要になることを見越した瑞賢は、自分の家が焼ける危険も顧みずに木曾に向かい、材木を買い占めて財を得ました。これを基に建築請負業も始めると、幕府や諸大名から注文を受けて富を築き、御用商人として多くの公共事業に携わるまでになります。

瑞賢は、用意周到に仕事を進めた一方で、周囲の人をあっと言わせるようなアイデアマンだったといいます。人の成功を自分のことのように喜ぶような人だったともいわれています。

廻船業を営んでいたわけでもなく、奥羽を相手に商売をしていたという記録も見当たらない瑞賢が、なぜ御城米廻米のための航路整備という大事業を幕府から命じられたのか、はっきりした理由は伝わっていませんが、幕府の強い信頼を得ていたのは確かです。また才覚に恵まれただけでなく、こうした姿勢で仕事に臨んだ瑞賢だからこそ、この仕事を成しえたのではないのでしょうか。

西廻り航路開設当時の出羽国の天領（幕府領）			
地域	領地	石高	経過
置賜	屋代郷	3万石	寛文4年(1664)、米沢藩の領知半減によって幕府領となり、その後もしばらく米沢藩預領として城代が置かれた。元禄2年(1689)からは幕府代官支配となる。現在の高島町。
	谷地領	1万5千石	寛永4年(1627)、土岐頼行の上山藩転封に伴い幕府領となり、山形藩鳥居氏の預領となる。現在の河北町。
村山	漆山領	3万石	寛文8年(1668)、奥平氏の山形藩転封に伴い幕府領となる。現在の山形市。
	寒河江領	2万石	元和8年(1622)、最上氏改易後に幕府領となり、山形藩鳥居氏の預領となる。寛永3年(1626)に山形藩領となるが、同13年(1636)に保科氏が入部すると再び幕府領となる。
	尾花沢領	2万石	寛永13年(1636)の保科氏入部に伴い、寒河江領とともに天領となる。
庄内	大山領	1万石	寛文8年(1668)に亡くなった藩主・酒井忠解に跡継ぎがなく、翌年に幕府領となる。
	丸岡領	1万石	寛永9年(1632)、改易となった熊本藩主・加藤忠弘が、罪人として庄内藩預となりあてがわれたが、承応2年(1653)に忠弘が亡くなり幕府領となる。
秋田	由利領	1,858石	寛永8年(1631)の仁賀保兵庫病死、同12年(1635)の打越左近病死により、併せて1万石余が庄内藩預領の天領となる。その後、1万1,858石に増える。同17年(1640)に生駒氏の矢島入部により、1万石は生駒氏の私領となる。

参考図書 『山形県史 二巻』『新編 庄内史年表』『酒田市史改訂版 上巻』



酒田町絵図／明暦二年（『飽海郡誌』より）  
 現存する酒田の町絵図では最も古いものです。当時、酒田にあった上蔵（新井田蔵）、山形蔵、下蔵が描かれています。上蔵と下蔵は庄内藩の米蔵、山形蔵は山形藩の蔵でした。西廻り航路開設以前、酒田に運ばれた御城米は、新井田川沿いに並んだ酒田商人の蔵宿に保管していましたが、瑞賢は蔵宿を使わず、御城米専用の御米置場を新たに造りました。このため、蔵宿を営む商人は大きな打撃を受けました。



御米置場絵図／江戸後期

瑞賢は西廻り航路の整備にあたって、現在の日和山公園の場所に、俗に「瑞賢庫」と呼ばれた御城米専用の御米置場を造りました。工事には庄内藩があたり、酒田と郷村から延べ3万398人の人足が集められ、約1か月で完成させました。蔵は設けず、米は土間に野積みにして、雨で濡れないようにカヤやワラで編んだ簀や蓑のようなもので覆ったといわれます。計算上はおよそ7万2千俵を積み上げることができました。

御米置場は明和4年(1767)の洪水で破損し、本間光丘が命じられて修理に当たっています。この絵図は、その後に描かれたものと思われます。当時、約1.5ヘクタール(82間3尺×54間)の広さがあったことが分かります。

## 古文書に見る御城米第一船出帆までの記録

寛文11年(1671)、出羽国の御城米廻米を命じられ、酒田湊からの西廻り航路で運ぶことを決めた瑞賢は、すぐに瀬戸内海の備前(岡山県)、讃岐(香川県)などに人を派遣して、海路の安全性や湊の利便性などを詳しく調査させました。同時に酒田にも調査のために人を派遣しました。

調査結果の報告を基に立てた廻米計画が幕府の許可を得ると、年明け早々に酒田に人を差し向け、この大事業の実施に向けて準備に取りかかります。

この時、庄内藩が取り組んだ準備の内容や規模、工程については、酒井家入部後の藩の歴史をまとめた『大泉紀年』など、古文書に記録され、第一船が出帆するまで瑞賢の動向も伝えられています。

覚  
今度、羽州延沢・大山・  
漆山領の八木(米)

御城米として江戸へ相廻し  
候間、難風の時分、浦々

にて、兼て仰せ付け候ごとく  
相守るべし。万一船破損

せしめ、濡米これ有るに於いては  
紛失せざるようにこれを取揚るべし。

浦辺の所々に川村  
瑞賢手代差し置きの間、

手寄の所へ早速注進  
いたし、これを相渡すべし。浦

役これ有る湊たりというとも、  
御城米船の儀に候間、

これを取るべからず。惣て何方  
より相廻し候御城米

なりというとも、難風  
又は船破損の節は、精

を入るべし。なお御勘定  
所より相触れるべくもの也。

寛文十一亥

十二月二十一日

江戸より羽州秋田迄

浦々湊中

内膳 但馬 大和 美濃

羽州延沢・大山・漆山領御城米、江戸回米の浦触 (写)  
寛文11年(1671)  
原本は酒田市立光丘文庫蔵

河村瑞賢が幕府に提出した「西廻り航路」の整備計画が許可され、この航路による出羽国御城米の江戸廻米が実施されることが決定すると、幕府は航路沿いにある湊に、御城米船が破損した場合の対処についての御触れ書きを、老中の名前でもしました。日付は寛文11年12月21日となっています。もし船が破損したら、水浸しになった米もすべて引き揚げ、主要な湊に配置した河村瑞賢の手代に知らせて処理させること、浦役(入港税)を徴収する湊であっても、御城米船からは取らないことなどを言い渡しています。

『大泉紀年』に記録された瑞賢と庄内藩の動向

寛文12年1月9日

延沢(尾花沢領)、漆山(山形)、大山の御城米の江戸廻米を、河村瑞賢が直廻しで行うことになり、江戸の老中、役人からの通達が鶴岡に着いた。これまで御城米は酒田にある蔵に入れていたが、別の場所に御米置場を造って野積みにすることになり、瑞賢の手代がその指図をするという内容だった。

この通達は酒田町奉行・中台式右衛門から亀ヶ崎城城代・松平藤兵衛に届けられた。



1月17日

瑞賢の手代・雲津六郎兵衛が酒田に着き、二木九左衛門(町年寄)の家を宿とした。六兵衛は正月末に山形に行き、代わりに梅津三郎兵衛が来る。



1月25日

御米置場の工事が始まる。(2月24日に完成)



2月24日

御城米を積んだ船が初めて酒田に着き、御米置場に積み上げた。その晩から、山口伝右衛門、栗田伝右衛門の二人が10日交代で火の番をする。



4月8日

河村瑞賢・伝十郎の父子が酒田の二木九左衛門宅に着いた。途中で出迎えた酒田町年寄三人と内町・米屋町の役人に対し、瑞賢は駕籠を降りてあいさつした。二木家に着くと、町奉行・中台式右衛門と御普請奉行の三浦七右衛門・細井松兵衛、御歩行(御徒目付?)・仙場彦右衛門が袴姿であいさつに訪れた。



5月2日

御城米を積んだ船が初めて酒田湊から出帆する。



5月10日

河村瑞賢父子が酒田をたち江戸に向かう。

『大泉紀年』は、酒井氏が庄内に入部した元和8年(1622)から天和元年(1681)までの庄内藩の歴史を、藩の事業としてまとめた記録です。

『鶏肋編 第二十五冊』／天保五年(一八三四)より

(原本は酒田市立光丘文庫蔵)

『鶏肋編』は、庄内藩校「致道館」の司書を勤めた加藤正従が、天保五年に亡くなるまでの約三十年をかけて、庄内藩の古文書を整理し、書き写した資料集です。その中の「寛文十二年壬子年川村瑞賢下向二付覚書」から、御米置場の工事の規模や工程について書いた部分を抜粋しました。

工事は一月二十四日に始まり二月二十四日に完成しましたが、庄内中から毎日千二百〜千三百人が働きに来たこと、この年は残寒がひどく、二月の初め(現在の三月)まで毎日のように吹雪く中で工事をしたことなどが分かります。

右御米置場、七、八十間<sup>けん</sup>四方、浜の砂引きならし、四方土居、芝、惣柵をふり固めの内、役人居り所迄<sup>まで</sup>、二月半時分迄に残らず出来候。

四方、柵を振り候節は、鶴ヶ岡御普請奉行中村七兵衛も参られ候。

右御普請中、一日の出人足、千二、三百人宛<sup>ずつ</sup>出候由<sup>よし</sup>。  
尤も庄内中より出候<sup>もつと</sup>。

右御普請中、松平藤兵衛殿(※)も場所へ御見舞候。

右御普請、正月半末より初まり、二月半時分に出來、此の年は余寒<sup>はなは</sup>甚だしく、二月初迄も日々の雪吹に候えども、日々大分の出人足ゆえ、早速致し出来候。

※松平藤兵衛：亀ヶ崎城代

## 河村瑞賢が立てた御城米の廻米計画

### (1) 回漕船について

- ・民間の船を雇い、幕府の幟(のぼり)の日の丸を立てる。
- ・北国海運に慣れた讃岐の塩飽島、備前の日比浦、摂津の伝法・河辺・脇浜などの船を雇う(瑞賢は、特に堅牢な塩飽島の船を推している)。

### (2) 運賃と酒田での米の保管について

- ・最上川の川舟の運賃、舢舨船で廻船に米を積み込むまでの費用を幕府が負担する。
- ・倉庫使用料の削減と火災からの保護のため、酒田の海岸に専用の米倉を設ける。

### (3) 安全対策について

- ・寄港地の入港税を免除させる。
- ・岩礁で危険な長門下関湊には水先案内船を備える。
- ・志摩鳥羽湊口の菅島には、毎夜のろしを上げる。

### (4) 寄港地について

- ・寄港地を①佐渡の小木②能登の福浦③但馬の柴山④石見の温泉津⑤下関⑥大坂⑦紀伊の大島⑧伊勢の万座⑨志摩の安乗(畔乗とも書く)⑩伊豆(静岡県)の下田とする。
- ・寄港地には番所を設けて手代を置き、沿道の諸侯、幕府代官にも船の保護に当たらせる。

## 北前船の寄港地として繁栄した酒田湊

西廻り航路が開設され、その安全性が知られるようになると、津軽や秋田などの日本海諸藩も、大阪まで直航で年貢米を運ぶようになります。また航路の基点となった酒田湊は飛躍的に発展を遂げていきます。航路開設から11年後の天和3年(1683)の酒田の家数は、開設前の明暦2年(1656)の1,277戸から2倍近い2,251戸まで増えていることから、その成長ぶりがうかがえます。

その後、蝦夷地(北海道)と大坂の間を行き来して、さまざまな品物を売買する北前船の時代が到来します。西廻り航路は北前船の一大物流ルートとなり、酒田湊には全国各地から船が集まり、さらににぎわいを増していきました。



酒田湊日和山眺望図  
作者不明／江戸後期



## 『惣問屋名前調書』（山田家文書）に掲載されている酒田の問屋98軒

加賀屋甚助	玉屋久右衛門	下村屋與治兵衛	鐙屋惣右衛門
根上屋善兵衛	三河屋茂右衛門	上林屋萬吉	藤屋傳之丞
美濃屋彦兵衛	本間正七郎	油屋貞吉	美濃屋利助
加賀屋多右衛門	本間屋長三郎	樽屋五平	油屋又兵衛
越後屋長次郎	越前屋仲兵衛	小針屋太七	本庄屋四郎兵衛
加賀屋徳次郎	柿崎屋孝三	筑前屋太郎右衛門	山口屋三六
泉屋源蔵	齋藤屋八三郎	唐仁屋藤助	大沼屋平八
加藤屋清七	永田屋治右衛門	渡辺屋五兵衛	越後屋三右衛門
羽守屋彌右衛門	内匠屋七右衛門	安田屋甚吉	渡部屋五郎右衛門
叶屋治兵衛	加賀屋太郎右衛門	松井屋吉四郎	酒屋調右衛門
半田屋利助	山崎屋治助	小幡屋嘉兵衛	柿崎屋孫三郎
本間屋幸三郎	津國屋太助	本間屋弥平	布袋屋三四郎
津國屋文兵衛	吉田屋善八	越後屋仲右衛門	本間屋幸四郎
曾根田屋重兵衛	齋藤屋喜七	小田屋治右衛門	越前屋藤右衛門
柿崎屋源右衛門	小山屋八右衛門	柴田屋孫右衛門	木屋市郎兵衛
近藤屋新助	内匠屋太郎右衛門	村山屋彦七	網干屋與右衛門
大黒屋仲吉	加登屋與兵衛	本間屋竹三郎	池田屋藤七郎
大丸屋市右衛門	塩越屋庄右衛門	柴田屋長七	池田屋松兵衛
奥村屋七三郎	西屋源三郎	池田屋重吉	能代屋八十吉
内藤屋文蔵	池田屋市郎右衛門	酒屋長八	板屋善太郎
小倉屋徳兵衛	中國屋佐治兵衛	飛嶋屋佐七	玉木屋喜三郎
須田屋長助	越後屋藤十郎	齋藤屋勤左衛門	青塚屋佐助
五十嵐屋七郎右衛門	眞田屋伝六	中嶋屋平三郎	澁谷長兵衛
中國屋傳兵衛	玉木屋治郎吉	富士屋孔右衛門	後藤屋金三郎
伊勢屋治郎右衛門	大久保屋儀右衛門		

江戸後期、酒田にあった廻船問屋98軒の名前が記されています。加賀屋、三河屋、美濃屋、越後屋、筑前屋などの屋号は、出身地と考えられます。原本は酒田市立光丘文庫蔵。



## 日和山公園になったずいけんぐら瑞賢庫

西廻り航路開設から約200年におわたって御城米を保管してきた瑞賢庫(御米置場)は、江戸幕府の滅亡とともに役割を終え、明治2年に新政府によって壊されました。跡地は現在、江戸時代に常夜灯が置かれた日和山(現在は展望台)とともに日和山公園になっています。ちょうど瑞賢像が見下ろしている広場や、瑞賢庫跡碑がある駐車場などが、瑞賢庫の敷地に当たります。

この場所は、明治維新から間もない明治6年(1873)に太政官布告により公園用地となり、同14年(1881)の明治天皇巡幸の際、広大な工事が行われました。「日和山公園」と命名されたのは同23年(1890)のことです。

大正4年(1915)に大正天皇即位記念として大改造されましたが、野球がブームになるとグラウンドが造られ、祭りの見世物小屋やサーカスなどの催しにも利用されました。戦後には都市公園になると児童公園や噴水などが整備されました。

瑞賢像や千石船が浮かぶ池は、昭和60年(1985)に、市制施行50周年記念事業として造られたものです。



瑞賢像から見下ろした現在の日和山公園



明治中期の日和山公園／明治期

現在常夜灯が立っている展望台は、大正4年(1915)に日和山公園の大改修が行われるまではもっと高さがあり、「朝日山」と呼ばれていました。そこから酒田港を望んだ風景です。

松に囲まれ建物が建っている場所に瑞賢庫がありました。

## 鉄道敷設工事のために伐採された瑞賢庫跡の松

酒田に鉄道が開通したのは大正3年(1914)。翌年には酒田駅から最上川駅(現在の酒田港駅)を結ぶ臨港線も開通しました。

臨港線の工事が行われていた大正2年10月、酒田町は、元陣屋(瑞賢庫跡)の松19本が工事の妨げになるので伐採したいという、鉄道院からの交渉を受けます。場所は特定できませんが、鉄道用地にあたっていることから、日和山公園下の酒田港に近い場所に生えていた松だったと考えられます。

本来であれば町議会を通して決めなければなりませんでしたが、緊急事案だったため、松を伐採した後に議会を開いて事後承諾を得ました。

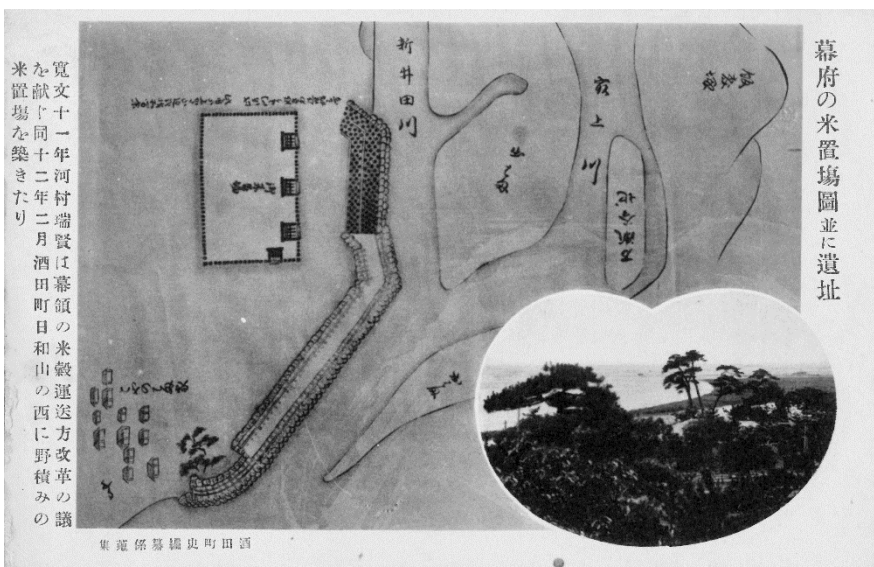
議会では酒田町を非難するような意見はありませんでしたが、酒田港を出入りする船の目標物であり、歴史の古い松を切らずに済む方法はなかったかという質問が出ています。これに対して当時の中村弘助役は、ほかに良い案がなく、やむを得ず切ったと答えています。

切られた松は65円10銭で払い下げられ、代金は酒田町の基本金に組み入れられました。



△望子口港ヨリ望△ (所名田酒)

絵葉書「公園ヨリ港口ヲ望△」／大正期  
人がいる場所が、日和山公園改修後の朝日山です。その下が瑞賢庫の跡地です。



幕府の米置場圖並に遺址

酒田町史資料絵はがき

「幕府の米置場圖並に遺址」／大正期

大正十年(一九二二)に酒田町史編纂係が製作した「酒田町史資料絵はがき」の中の一枚です。酒田の歴史において、御米置場が重要な場所であることが分かります。

寛文十一年河村瑞賢は幕領の米穀運送方改革の議を献上し同十二年二月酒田町日和山の西に野積みの米置場を築きたり

東洋関係纂史町田酒



瑞賢庫跡／昭和八年（一九三三）頃  
 「史蹟河村瑞賢言」と彫られた標柱の周りで、子どもたちが遊んでいます。最後の文字は「址」かもしれませんが、場所は日和山公園の一角ですが、特定できません。いつ建てられたかも不明です。



野球ができるグラウンドがあった頃の日和山公園／昭和三十年代  
 日和山公園の広場が野球のできるグラウンドだった時代に撮られた写真です。



子どもまつりのサイクリング大会  
 ／昭和四十八年（一九七三）五月五日  
 この日は、ほかに三輪車大会などの催しが日和山公園で行われました。今と違い、まだ芝生が敷かれていない砂地だったことが分かります。今も酒田まつりや桜まつりなどの会場となり、大勢の人でにぎわう日和山公園ですが、この当ても市民盆踊り大会などさまざまなイベントが行われていました。



昭和42年（1967）8月6日付「新酒田」酒田で発行されていた地域新聞です。酒田の郷土史家として活躍した故田村寛三氏が、「港都酒田市発展の祖」と題して、河村瑞賢の西廻り航路開拓について執筆しています。「写真風土記」というコーナーでは、瑞賢庫を取り上げています。



日和山公園駐車場にある瑞賢庫跡碑  
上から見ると「米」という字の形になって  
います。いつ建てられたかは不明。



## 西廻り航路整備以外にも数々の功績を残した瑞賢

河村瑞賢は、元和4（1618）に伊勢国度会郡東宮村（現在の三重県南伊勢町）で生まれました。数え13歳で江戸へ出ると、大八車などで荷を運ぶ車力として生計を立てていましたが、明暦の大火をきっかけに材木商として財を成しました。大火後の江戸の再建にも手腕を振るい、幕府の信頼を得て、御用商人として数々の公共事業でも成果をあげます。

明暦の大火から15年後、東廻り航路と西廻り航路の整備という大事業を成し遂げ、当時の日本の物流に改革をもたらした瑞賢の名前は全国に知れ渡ります。その後も、畿内（現在の大阪、奈良、京都など）の治水事業、越後高田藩の郷津湾築港や銀山開発などに携わりました。こうした功績により、晩年には旗本として武士の身分を与えられ、5代将軍・徳川綱吉にも謁見しています。元禄12（1699）年、82歳で亡くなり、鎌倉の建長寺に葬られました。

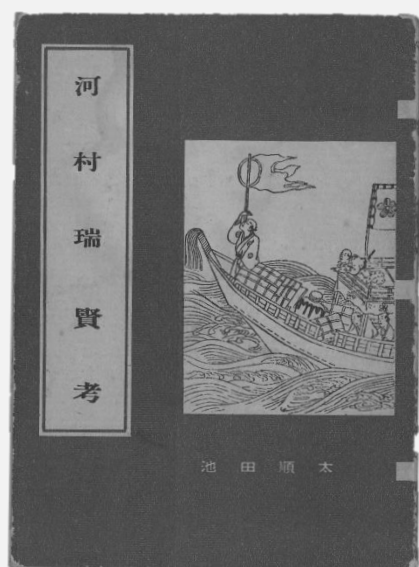
瑞賢は人柄も働きぶりも申し分ないうえに、頭の回転がはやく、さまざまなアイデアを発揮しました。商人を志した瑞賢が、川に流されたお盆のお供え物の野菜を集め、漬物を作って販売したところ、たいそう評判になったという話を聞いたことがある人も多いのではないでしょうか。

## 村瑞賢略年譜

年（西暦）	年齢	事項
元和 四（一六一八）	一	二月十五日、伊勢国度会郡東宮村（現三重県南伊勢町）に生まれる。幼名・七兵衛。
寛永 七（一六三〇）	一三	江戸に出て車力（大八車）で荷を運ぶ仕事になる。
一四（一六三七）	二〇	元服して名を十右衛門と改める。行商から人夫頭をへて材木商になる。
明暦 三（一六五七）	四〇	江戸大火。木曾の材木を買い占め、利益を得る。
寛文 一（一六七二）	五四	東廻り航路を整備。陸奥国の御城米回漕の起点を荒浜にする。
一（一六七二）	五五	西廻り航路を整備。出羽国の御城米を酒田から運ぶ。その功績に対し幕府から三千両が与えられる。
延宝 二（一六七四）	五七	越後の高田藩に招かれ、郷津湾を築港する。
六（一六七八）	六一	高田藩の中江用水を完成させる。
天和 元（一六八一）	六四	明暦三年から続いた高田藩の上田銀山が越後騒動で中止となる。
三（一六八三）	六六	畿内（京・大坂・奈良）の治水工事に着手する。
貞享 元（一六八四）	六七	大坂の安治川（新川）の疎通工事に取り組みが、いったん中止する。
二（一六八五）	六八	安治川の工事を再開する。
四（一六八七）	七〇	治水工事を終え、五月に江戸に帰る。
元禄 二（一六八九）	七十二	幕命で越後の上田銀山、会津の白峯銀山を調査経営する。
五（一六九二）	七五	鉱山の開発をやめる。
一〇（一六九七）	八〇	将軍・徳川綱吉に謁見する。
一一（一六九八）	八一	旗本武士になる。名を平太夫義通と改める。治水工事完成のため大坂へ行く。
一二（一六九九）	八二	三月、江戸に帰る。息子・通頭を伴い将軍に謁見する。六月十六日、八十二歳で死去。鎌倉建長寺に葬られる。

参考図書 古田良一著『河村瑞賢』、南伊勢町教育委員会編・著『商人をこえた日本の偉人 河村瑞賢』

※年齢は数え年



みちのく豆本 第一冊  
池田順太著「河村瑞賢考」  
昭和32年(1957)

瑞賢が亡くなってから258年目の昭和32年、酒田市では8月6日の港まつりに合わせて、「河村瑞賢250年祭」を執り行いました。当日は、瑞賢から9代目の子孫にあたる河村謙次さんと二女・良子さんを招いて、日和山公園で式典を行い、「酒田港開港の祖」である瑞賢の偉業をしのびました。商工・港湾関係者、市民代表など約100名が出席したそうです。

酒田市企画室長として、250年祭実現のために奔走した池田順太さんが、それを機に瑞賢の功績をまとめたのが、酒田の文化史に残る「みちのく豆本」の記念すべき第一冊目として発行された、この豆本です。池田さんは発行から間もない8月30日に、49歳の若さで亡くなりました。

## 御城米の廻米と瑞賢庫（御米置場）の歴史

年（西暦）	御城米の廻米・瑞賢庫に関する出来事	庄内と国内の出来事
元和 8 (1622)	最上氏改易により寒河江領2万石が出羽国で最初の天領（幕府領）となる。	庄内に酒井忠勝が入部する。
明暦 3 (1657)		江戸で大火。この頃、江戸の人口が増加し米の需要が増える。
万治 2 (1659)	幕府が出羽の御城米輸送を江戸商人の正木茂左衛門（半左衛門とも）、伊勢屋孫右衛門に請け負わせる。	
寛文 元 (1661)	4月、由利領の御城米を酒田に出す。	
寛文 6 (1666)	幕府が陸奥、出羽の御城米を仙台領荒浜から江戸に送る。	
寛文 8 (1668)	正木茂左衛門が御城米の最上川川下し運賃を安くしようと画策。酒田と大石田の川船差配役（大庄屋）が協力して運賃値上げを交渉している。	
寛文 9 (1669)	河村瑞賢が、陸奥国信夫郡の桑原・福島などの御城米数万石の江戸廻米を幕府に命じられる。	
寛文10 (1670)	正木茂左衛門らが大山領の御城米廻米も請け負う。	
寛文11 (1671)	河村瑞賢が「東廻り航路」を整備し、陸奥の御城米の江戸廻米を行う。出羽の御城米の江戸廻米も命じられる。	
寛文12 (1672)	1月、河村瑞賢手代の雲津六郎兵衛が来酒。御城米を置く御米置場（通称 瑞賢庫）をつくる。 5月、瑞賢が整備した「西廻り航路」で最上・由利・丸岡の御城米を江戸に送る。	
延宝 元 (1673)	河村瑞賢が幕府にはかり、酒田に城米浦役人二人を初めて置く。初代は二木九左衛門と二木庄兵衛の二人。 御城米下し破損米の弁償規約が定められる。	庄内藩が私領米の大津廻しをやめ、西廻りで大坂に送る。
延宝 7 (1679)	御城米川下しの運賃を改める。	
天和 元 (1681)	五月、瑞賢の廻米仕法替えにより、天領農民の江戸廻米についての負担が重くなり、村山郡漆山領3万石の惣百姓で幕府巡見使に前のように商人廻しに願いたいとの訴状が出される。	庄内藩は私領米の西廻り廻米をやめ、大津経由に戻す。
元禄 元 (1688)		井原西鶴著『日本永代蔵』が出版される。
元禄 5 (1692)	6月、米沢藩の御用商人・西村久左衛門が置賜地方城米の最上川下し江戸回送を請け負い、最上川難所の開削工事を行う。	
宝永 元 (1704)	5月、初めて酒田から御城米を東廻りで江戸に送る。	
享保 5 (1720)	9月、幕府は出羽などの御城米の西廻りによる江戸廻米の差配を江戸の廻船問屋・筑前屋作右衛門に命じる。	
享保 8 (1723)	酒田・鶴岡商人に城米や藩米の沖瀬取を請け負わせ、200俵積みの瀬取船17隻を新造する。	
享保12 (1727)		大坂堂島に米会所ができる。
宝暦 4 (1754)	4月、酒田町奉行の城米出船見張小屋を大浜に建てる。	
安永 元 (1772)	4月、柴橋（寒河江）代官が、御米置場は風害があるので庄内藩の蔵の借入を申し込むが許されない。	
安永 9 (1780)	夏期は最上川河口が浅くなり、御城米船の出港が困難となるため、宮野浦に船を置き、瀬取往来の便宜を図る。	

年 (西 曆)	御城米の廻米・瑞賢庫に関する出来事	庄内と国内の出来事
寛政 2 (1790)	5月、御城米船の出帆前後にかかわらず、その日の商船の出港を許す。	寛政の改革が始まる。
寛政 3 (1791)	御城米川下し船は享保年間に165隻と決めていたが、その後破損が多いため120隻に決める。	
天保10 (1839)	7月、御城米船をはじめとする難破船の荷物陸揚げの際の部署を定める。	
天保11 (1840)		庄内藩主・酒井家の越後長岡転封を阻止する運動が起こる(三方領知替)。
天保12 (1841)	6月、御城米出入に関する町方の出役・番人・掃除・普請などを取り調べ、城代に出す。御城米出入に関する規約を定める。	天保の改革が始まる。
天保15 (1844)	4月、浦役人廃止の旨が達せられる。御城米船難破のときは、浦高札ならびに浦触れの通りにすべきことが達せられる。	
文久 元 (1861)	12月、御城米川下し破損米の弁償分担割を、郡中3分の2、船方3分の1と定める。	
明治 2 (1869)	4月、官軍により御米置場が壊される。	亀ヶ崎城に新政府により酒田民政局が置かれる。
明治14 (1881)	9月、日和山に公園地を設け(瑞賢庫跡地)、広大な普請をする。	

参考図書『酒田市史年表 改訂版』『酒田市史 改訂版(上)』『山形県史 第二巻』『山形県史 第三巻』

